

所長就任にあたって



松村 恵司 所長

田辺征夫前所長の後を引き継ぎ、2011年10月1日付けで奈良文化財研究所の所長に就任しました。田辺前所長の6年半は、独立行政法人改革の荒波の中で、国立文化財機構の一施設として再スタートを切るなど、国の行財政

改革にともなう変革の期間でした。また、去年は平城京遷都から1300年の記念すべき年を迎え、平城宮のシンボルである第一次大極殿の復原建物が完成し、平城宮跡を主会場に平城遷都1300年記念事業が盛大に開催されるなど、平城宮跡の重要性が広く国民の間に再認識されました。こうした時期に研究所の舵取りにあたられた田辺前所長のご努力とご労苦に改めて感謝申し上げます。

奈文研は、文化財の宝庫である古都奈良の地で、実物に即した総合研究を実施し、その調査研究成果を文化財保護行政に反映させる目的で、1952年に文化財保護委員会の付属機関として発足しました。その後、社会情勢の変化や時代の要請により、組織は拡充と変貌を遂げ、現在は、研究支援推進部、企画調整部、文化遺産部、都城発掘調査部、埋蔵文化財センター、飛鳥資料館の4部、1センター、1館体制で、文化財の調査研究、保存と活用に関する多角的な業務を進めています。来年で還暦、60周年の節目を迎えますが、この間、幾多の諸先輩が積み重ねた調査研究成果は、奈文研の愛称とともに広く社会に認知され、国の内外から高い評価を得ているところです。

振り返ってみますと、研究所の発展を支えてきた原動力は、考古学、文献史学、建築学、造園学、保存科学などの異なる分野の研究者が、一つのチームを組んで遺跡の発掘調査を遂行する奈文研特有の調査体制に基盤があると思います。こうした学際的な共同研究とチームワークをこれからも大切に維持し、地に足をつけた文化財の実践的、総合的な調査研究を推進していきたいと考えています。

独立行政法人制度の導入から10年が経過した現在、更なる独立行政法人改革により、制度や組織の見直しがおこなわれるなど、奈文研を取り巻く環境は一層厳しさを増しています。これを機に、改めて奈文研の存在意義や社会的役割、業務の必要性を自ら問い直し、足元を固めるとともに、これまでに蓄積した膨大な研究成果をわかりやすく社会に還元し、情報公開や行政サービスの質を高める努力が大切になると考えています。

また、今年は東日本大震災という未曾有の大災害が発生し、復旧・復興事業が最大の政治課題となっています。奈文研も被災文化財を救出する文化財レスキュー事業に積極的に取り組んでいましたが、今後本格化する復興事業関連の文化財の調査や保存・修復事業にも積極的に協力していきたいと思っています。

文化財は地域の歴史や伝統文化を今日に伝える貴重な遺産であり、地域の人々に大切に譲り伝えられてきました。被災文化財の復旧は、地域の絆を維持し再生する上で、重要な作業となるでしょう。

奈文研が抱える課題は山積していますが、今後も調査研究の質の向上を図るとともに、国内外の文化財の保存修復や技術者の人材育成に協力し、我が国の歴史や文化を広く国内外に発信する努力を続けていきたいと考えています。

今後とも皆様方の暖かいご支援とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

(所長 松村 恵司)